明日はれるかな？

落ちぶれた天使

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
明日はれるかな？

【Ｎコード】
Ｎ９２８１Ｚ

【作者名】
落ちぶれた天使

【あらすじ】
コナンの短編集です☆
カップリングは新蘭、コ蘭、平和、快青、などなど☆
ちがうのもたまにやるかも？
感想のとこでリクエストおくってください☆
たぶんかきます☆

新デレラ。（前書き）

あるクリスマスのおはなし・・・
蘭はもうコナンの正体にきずいているが話していません。

新デレラ。

蘭はひとり雪のなかたっていた。

工藤邸のまえで。

今日はクリスマス。

蘭はもしかしたらとおもい工藤邸にやってきた。

だが一向に誰もやってくる気配はない。

蘭ははぁ。とおおきくため息をついた。

息が白くなる。

近くにコナンも木の陰にかくれて蘭を悲しくみつめていた。

蘭は空をおみあげて目を潤めた。

蘭「かえってきてよぉ。新一・・・」

その涙はとどめなくながれていく。

コナンはそれをみまもることしかできない自分に腹がたった。

蘭の様子は隣のあがさ邸から博士や哀もこっそりみていた。

蘭はもぬけのからになったようにしゃがみこむ。

蘭「うえっうえっ」

蘭は冷たい雪をてで強くにぎりしめた。

コナンは唇をつよくかみしめた。

もとの新一の力だったら、唇からは血がでていたであろう。

コナンは裏口からこっそりあがさ邸にはいる。

コナン「なぁ、灰原・・・、解毒剤、ひとつだけくれねぇか？」

哀「だめよ。たしかにいまの彼女をこのままだまってみているのは、正直、つらいわ。だけど、いま一時的にしかもどれない状況であっても、彼女をさびしい思いにさせるだけ・・・。」

コナン「そこをなんとかたのむよ。たしかに蘭がさびしくなるのは分かる。だけどよ、あいつ毎年クリスマス楽しみにしてたんだ。一年で2番目に楽しい日って。だから俺といたいって。」

哀はしばらく下をみてからいった。

哀「わかったわ・・・その代わり、薬の効力は２４時間弱。０時にはかえってきなさい。」

コナン「ほんとか！！サンキュー、灰原！！」

哀「まったく。はい。これ薬。服はどうするの？」

コナン「まえにここにおいていっちまった制服きるよ。」

哀「じゃぁいってらっしゃい。男版の新デレラさん。」

コナン「ハハハ・・・」

コナンはそういうとトイレにはいっていった。

しばらくすると新一にもどったコナンがでてくる。

哀「じゃぁいってらっしゃい。新デレラさん。」

新一「じゃあおまえは魔法使いか？」

哀「さぁ？どうかしら？」

新一はそういうと小走りでていった。

新一「蘭！！」

蘭「新一！？」

蘭はたちあがって新一をみた。

それからいっきにまわしげりを新一の顔直前までにむける。

新一は一瞬あおざめた、が、蘭は足をもどすと新一にだきついた。

蘭「クリスマスぐらいかえってきてよ～！！！ばかぁ！！」

新一「ごめんな、蘭。でも馬鹿はよけいだぞ。」

蘭「あら、余計じゃないとおもうけど？」

新一「にゃろ。」

蘭「あのね、私新一が今日きてくれるんじゃないかっておもってたんだぁ。」

新一「なんでだ？」

蘭「だってさ、サンタさんはプレゼントをくれるのよ？ずっと、新一がかえってくるよーにってねがってたんだもん。」

新一「サンタさん？がっきっぽいことというな蘭。」

蘭「もう！なによがきっぽいって～」

新一「すいませんすいません。」

蘭「わかればよろしい！！」

２人はしばらく雪がふるなか笑いあった。

外はさむいが２人のまわりにだけはあたたかい空気がながれている。

そしてついに１２時１分前。

新一「わりい蘭。俺もういかなくちゃ。」

蘭「嘘・・・いかないでよ・・・！新一ぃ！！」

蘭はなきだした。

新一「わりい蘭・・・絶対、またもどってくっからよ。」

蘭「ほ、ほんと？」

新一「ああ。あたりまえだ！！」

２人は最後にだきあうとわかれた。

蘭は新一があるいていくのをみつめながらしずかにつぶやいた。

蘭「いつかはなしてくれるよね？新デレラさん？そしてコナン君。」

蘭はそれだけかなしそうにつぶやくと、家にかえっていった。

生きてるってかんじ♪（前書き）

ｗｉｓｈ０２さんからのリクエストです☆
蘭一人称です。
新一はちょっとまえにもどってきて正体もはなしたせっていです。

生きてるってかんじ♪

私はいま幸せです！！

だって新一が帰ってきたんだもの！！

今日は新一とトロピカルランドにいくの！！

ひさしぶりだなぁ・・・

最後にいったのは私が記憶喪失になったとき。

あの時いってくれた言葉、またいってくれないかなぁ？

～トロピカルランド～

蘭「ねぇねぇ新一。ジェットコースターのらない？」

新一「ん？んぁいいよ？」

今日の新一なんか素っ気ないしそわそわしてる。

私のこと、きらいになっちゃったのかなぁ・・・？

さぁ、いよいよ私たちのばん！！

どきどきするぅ・・・

あれ？

今日新一、ホームズの話してない・・・？

新一「蘭、いくぞ。」

蘭「え？あ、うん！！」

よし、出発だ！

新一の手をにぎって。

あれ、新一赤くなってる？

なわけないよね・・・・

あ～あ。

のぼりはじめちゃった。

よし、目をつぶろう！！

新一「どうなんだろうな・・・・蘭・・・・」

え？

私？

私がなに？

どうなんだろうなって。

いまつぶやいた。

もしかして私ともうひとり好きな子がいて新一は・・・

思いっきりはしってるけど、私はかんじない。

でも、涙がでてくるよ・・・

おわっちゃった。

泣いてたのばれちゃったかな・・・？

笑おう。

無理やりでいいから。

だって新一とはもうあえない。

だって新一には他に好きな人がいるんだもん・・・。

最後くらい・・・・

最後くらい・・・・！！

だめだ。

涙があふれてきてとまらない。

新一がはなしかけてきた。

新一「おいどうしたんだよらん！！」

蘭「なによ・・・」

新一「へ？」

蘭「私以外に新一には好きな子がいるんでしょ！？だったら私なんかにかまわなくたっていいじゃないバカァ！！」

私はその場にいにくくなって逃げだした。

ずるいよね？

私。

新一をむりやりまいてベンチにすわって私はないてた。

歩美「あれ、蘭おねーさん？」

光彦「どうしたんですか！？」

蘭「歩美ちゃん、光彦君、げんたくん・・・」

そこには歩美ちゃん、光彦君、げんたくん。

もう2年生になったから3人だけできたのね。

げんた「どうしてないてんだ？」

あ。

泣いてたこと、ワスレテタ。

あぁ。

私は本当にバカだ。

こんなとこでなくなんて。

歩美「どうしたの？お願い。教えて蘭おねえさん。歩美達、恩返しがしたいの。」

やっぱりいいこだな。

歩美ちゃんって。

包み隠さず私はいままであったことをはなした。

げんた「ひっでえな。新一にいちゃん。」

光彦「そうですよ！！男のかたすみにもおけません！！」

そのときだった。

新一がはしってきたの。

新一「蘭！！」

蘭「新一！？」

新一「たく、かってにいなくなんなよ。まじあせる。」

蘭「嘘・・・」

新一「あ？」

蘭「うそじゃない！！新一には私のほかに好きな子がいるんでしょ！！」

新一「はぃ？そんなやついるわけねぇじゃねぇか。」

へ？

嘘・・・

だってだって・・・

蘭「だってどうなんだろうな？蘭ってつぶやいてたじゃない！！」

新一「あ、ああ。あれは別の意味だよ。」

別の意味？

どういうことなの？

新一「あ、あれはさぁ、お前の告白の答えがしりたかったんだよ・・

・」

嘘・・・

私の答え・・・

そんなのきまってるじゃない。

蘭「もちろん新一を私も好きにきまってるでしょ！！」

新一「う、嘘じゃねぇよな・・・？」

蘭「嘘じゃないわよ！！ずっと新一のことが私もすき！！」

そうだよ。

私は好きだよ新一のこと。

ずっとっずっと・・・。

新一「やべ、まじ嬉しい・・・」

蘭「へ？」

新一「本当、生きてるって感じ！！」

蘭「・・・・そうだね！！」

私たちはお互い笑いあった。

顔を赤く染めながら。

手をしっかり握って。

絆、愛をたしかめながら・・・

光彦「あ、あの・・・・」

蘭・新一「へ？」

歩美「歩美達がいるってことわすれてない？」

2人でまた顔を真っ赤にしてそっぽをむいた。

だけど背中がぴったりかさなる。

まぁ、それを探偵団が園子や志保にやとわれて撮影していたことは明日まで知る余地もなかったが・・・・

次の日、新一と蘭はクラス全員に冷やかされ、ふたりで頬を真っ赤にそめ、そっぽをむき、背中をぴったりあわせたとか。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9281z/

明日はれるかな？

2011年12月29日17時48分発行